



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ノルウェー探訪：芸術と公共空間が息づく都市
Author(s)	森, 傑
Citation	センターリポート, 56(2), 20-25
Issue Date	2026-07-01
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/100280
Type	journal article
File Information	Cent Repo. 56-2_20-25.pdf





ノルウェー探訪 ～芸術と公共空間が息づく都市～

もり すぐる
森 傑

北海道大学大学院工学研究院・教授

1. はじめに

北欧の国ノルウェーは、フィヨルドと呼ばれる氷河地形で知られる自然豊かな国である。人口は約560万人で北海道と同規模であるが、豊かな自然環境と社会制度のもとで高い生活水準を維持している。今回の訪問では、首都オスロと西海岸の都市ベルゲンを訪れる機会を得た。

オスロは政治・文化の中心都市であり、近年は建築や都市デザインの面でも国際的に注目されている都市である。一方、ベルゲンはフィヨルドの入り口に位置する歴史的な港町として知られている。本稿では、滞在中に見聞きした芸術、建築、公共空間、そして日常の中で印象に残った出来事について紹介したい。

2. ムンクの叫びたち

オスロと聞いてまず思い浮かぶ芸術家は、エドヴァルド・ムンクではないだろうか。代表作「叫び」は世界でも最も知られている絵画の一つであり、ムンクの作品はこの街の文化的アイデンティティとも言える存在である。今回の滞在中では、オスロ国立美術館とムンク美術館の両方を訪れ、それぞれに所蔵されている「叫び」を鑑賞することができた（写真1、写真2）。

ムンクの「叫び」は複数のバージョンが存在することで知られているが、実際に見比べてみると、同じモチーフでありながら色彩や線の表現に微妙な違いがある。画家が同じ主題を繰り返し描きながら表現を模

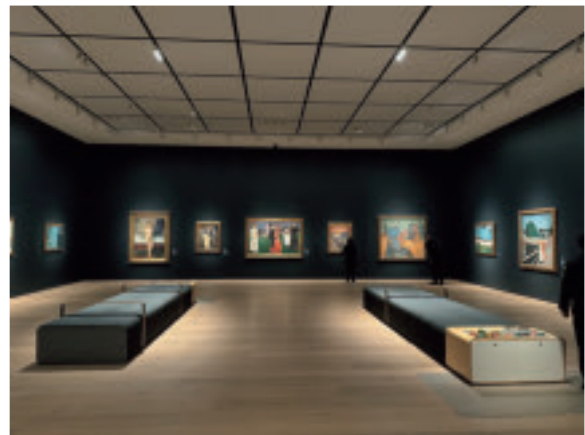


写真1 オスロ国立美術館



写真2 ムンク美術館

索していた感じが感じられ、非常に興味深かった。芸術作品は一枚の完成されたイメージとして語られることが多いが、その背後には多くの試行錯誤がある。建築や都市空間も同様に、完成した姿の裏側には長い思考と試行の積み重ねがあるのだろう。

また、オスロでは市庁舎も非常に印象的であった。ノーベル平和賞授賞式の会場として知られる建築であるが、内部のエントランスホールは巨大な壁画によって構成さ



写真3 オスロ市庁舎の壁画

れており、まるで一つの公共美術館のような空間となっている（写真3）。訪れた際にはちょうど結婚式が行われていた。壮大な壁画空間の中で市民の日常の儀式が自然に営まれている様子は非常に興味深かった。芸術作品が特別なものとして隔離されるのではなく、市民生活の中に溶け込んでいる点に、北欧の公共文化の特徴を感じた。

3. ヴィーゲラン公園

オスロにはもう一つ、芸術に関する印象的な場所がある。市内にあるヴィーゲラン公園である。彫刻家グスタフ・ヴィーゲランによる200点以上の彫刻が配置されたこの公園は、世界でも非常にユニークな公共空間として知られている。人間の身体や人生の様々な姿を表現した彫刻群が公園の中に連続して配置されており、歩きながら芸術作品を体験できる空間となっている。中心に立つ高さ約17メートルのモノリスは、



写真4 ヴィーゲラン公園

数多くの人体が絡み合うように彫刻された象徴的な作品である（写真4）。



写真5 オスロ・オペラハウス

公園全体は橋、噴水、広場、モノリスへと軸線状に空間が構成されており、都市公園でありながら一つのランドスケープ建築のようにも感じられる。特に中央へ向かって徐々に空間が展開していく構成には強い象徴性があり、彫刻単体だけではなく、公園全体が一つの総合芸術として計画されている点が非常に印象的であった。

訪れた日の朝は冷え込みが強く、公園の彫刻には霜がびっしりと付いていた。人体を表現したブロンズ彫刻の表面が白く覆われ、氷の結晶が細かな模様をつくっている様子は非常に美しかった。自然の現象が芸術作品に新たな表情を与えているようにも感じられた。このように芸術作品が都市の公園の中に配置され、市民が日常的に触れることができる環境は、北欧の都市文化の豊かさを象徴しているようにも思える。

4. オスロ・オペラハウス

オスロ港に面して建つオスロ・オペラハ



写真6 オペラハウスのエントランスロビー

ウスは、ノルウェーを代表する建築の一つである。設計はノルウェーの建築設計事務所スノヘッタ（Snøhetta）によるもので、白い大理石の屋根が海へ向かって緩やかに傾斜している特徴的な建築である（写真5）。それは海面からそのまま陸地が立ち上がるような造形となっており、巨大な建築でありながら周囲の水辺空間と連続的につながっている。ガラスファサードからは内部のロビー空間も見通すことができ、文化施

設にありがちな閉鎖性や威圧感を感じさせない点も特徴的である（写真6）。

この建築の最大の魅力は、屋根がそのまま公共空間として開放されていることである。建物の屋根を歩いて上ることができ、港や街の景色を眺めることができる。まるで建築そのものが都市の広場の一部になっているかのようである。訪れた日は朝の冷え込みで斜面が少し凍っており、子どもたちがその斜面を滑って遊んでいる姿が見られた。文化施設の屋根が都市の遊び場のように使われている光景は非常に印象的であった。

通常、劇場建築は公演時間以外には閉じた施設になりがちである。しかし、この建築では「上る」「座る」「眺める」といった行為そのものが公共空間として成立しており、公演を鑑賞しなくても市民が日常的に利用できる都市空間となっていた。

筆者は本誌207号の「シドニー滞在記」にてオペラハウスを紹介している。シドニーのオペラハウスは周囲の広場や海辺のプロムナードと一体となり、都市の公共空間として活発に利用されていた。オスロ・オペラハウスは屋根そのものを公共空間として開放している点で建築的手法は異なるが、文化施設が都市の開かれた公共空間として機能しているという意味では共通しているように思える。現在、旭川市民文化会館の基本計画策定に関わっているが、文化施設の建築が都市の公共空間としてどのように機能するのかという点について、今回の訪問から多くの示唆を得ることができた。

5. 図書館という公共空間

オスロ公立図書館も今回の訪問で印象に残った建築の一つである。正式名称は Deichman Bjørvika といい、オスロ湾に面した再開発地区ビョルヴィカの中心に位置している。すぐ近くにはオペラハウスがあ



写真7 オスロ公立図書館の吹き抜け

り（写真5左端）、この一帯は近年オスロの新しい文化地区として整備が進められている場所である。

建物はガラスを多用した開放的な外観を持ち、周囲の広場と視覚的にも空間的にも連続している。内部に入ると大きな吹き抜けを中心に立体的な空間が広がり、階段や通路が複雑に交差している（写真7）。各階は完全に仕切られているわけではなく、視線が上下方向にも抜ける構成となっており、建物全体が一つの大きな公共空間のように感じられる。

また、館内には閲覧席だけではなく、カフェ、イベントスペース、ワークショップ空間なども配置されており、図書館というより複合的な市民文化施設に近い。静かに読書をするだけでなく、人々が滞在し交流すること自体が建築の目的として計画されている。

特に印象的だったのは、多くの若者が自習をしている姿である。大学生や高校生と思われる若い人たちが静かに机に向かい勉強していた（次ページ、写真8）。図書館は



写真8 オスロ公立図書館の閲覧室

本を読むための施設というよりも、市民の学習空間、あるいは都市のリビングルームのような場所として機能しているように見えた。

6. 港町ベルゲン

オスロから飛行機で西へ約1時間、ノルウェー第二の都市ベルゲンを訪れた。ノルウェー西岸には氷河によって削られた複雑な入り江、いわゆるフィヨルドが数多く存在するが、ベルゲンはそのフィヨルドの入り口に位置する港町である。

中世にはハンザ同盟の交易拠点として栄え、港沿いに並ぶ木造建築群ブリッゲンは現在もその歴史を伝える景観として世界遺産に登録されている。カラフルな木造建築が海沿いに並ぶ景観は非常に印象的であり、細い路地や木造の通路には中世の商業都市の雰囲気は今も残されている（写真9、写真10）。現在は観光地として多くの人が訪れているが、かつてこの街が北ヨーロッパ交易の重要拠点であったことを実感させる空間でもあった。

港町らしく魚料理の店も多く、今回立ち寄った店で食べたフィッシュスープは非常に印象に残っている。クリームベースのスープに魚や野菜が入り、濃厚でありながら優しい味わいであった。また、街にはトナカイのホットドッグで有名なスタンドもあり、多くの観光客が列をつくっていた。



写真9 ベルゲン・ブリッゲン



写真10 ブリッゲンの木造建築

7. 空港のトイレ

ベルゲン空港では、トイレのサインが非常に印象的であった。男女のピクトグラムが描かれているが、よく見ると身体が前かがみになり、いかにも用が差し迫っているような姿勢で表現されているのである（写真11）。その様子があまりにも切迫していて、思わずクスッと笑ってしまう。空港という慌ただしい場所の中で、このようなユーモアのあるデザインに出会うと、少し肩の力が抜けるような気がする。

小さな工夫ではあるが、このような遊び心が公共空間の雰囲気を豊かにしているようにも感じられた。オスロのオペラハウスや図書館で見た公共空間の開放性とも通じ



写真11 ベルゲン空港のトイレ

るものであり、都市の文化的成熟を示す一つの表れなのかもしれない。

8. おわりに

ノルウェーの都市を歩いて感じたのは、芸術や建築、公共空間が市民生活の中に自然に溶け込んでいることである。ヴィーゲラン公園の彫刻やオペラハウスの屋根、図書館の学習空間などはいずれも市民の日常の中で使われている場所であった。ベルゲン空港のトイレサインのような小さな遊び心も含め、公共空間に対するこうした姿勢が都市の豊かさを支えているのだろう。今回の訪問は、芸術、建築、都市、そして日常生活がどのように重なり合って都市文化を形成しているのかを改めて考える機会となった。

